

九州大学山岳部 2015年冬合宿報告書

◆ はじめに

2015年12月26日から2016年1月1日にかけて行った冬合宿について報告する。

◆ 参加者

- 4年 中本裕哉 (SL)
- 3年 村松弾 (CL)
- 2年 山崎史也
- 1年 明坂将希、池田光希、藤山誠也
- OB 中溝幸夫、米澤弘夫

◆ パーティー編成

(アタック隊) 村松—山崎—中本、中溝—米澤

◆ 行動記録

12月26日(1日目) 天気：曇り時々雪

先発隊(中本)

- 5:30 富山駅
- 7:30 上市駅
- 8:10 伊折ゲート(取材)
- 8:30 伊折ゲート出発
- 10:00 馬場島着
- 10:30 先発隊出発
- 13:00 松尾平
- 14:30 偵察出発
- 15:30 1350m デボ
- 16:10 テント帰着

上市駅からのジャンボタクシーを伊折ゲートで降りると、すでに取材関係者が15人ほど待機していた。タクシーを降りてから、入山の支度をするまでカメラに撮られて、意気込みやザックの重さなどの質問をうける。慣れないことなので少し緊張するが、まあ悪い気はしないものだ。きれいな女性アナウンサーがいるかと期待していたが、残念ながらいなかった。カメラが回っている手前、フル歩荷のザックをさも涼しい顔をして担ぎ上げ、重さに顔をゆがめることもなく歩を進める。ゲートで見送りを受けてお別れかと思いきや、ゲートをくぐってからも10分ほどは撮られ続けた。普段とは異なる合宿の始まりであった。積雪の量はというと、路面のアスファルトが見えるくらいで馬場島までは皆無。3年

前と比べると非常に楽だった。そのせいかゲートから馬場島まで1時間半ほどで到着できた。本来の計画であれば、馬場島にテントを張る予定だったが、予定を繰り上げて隊を二つに分けて行動をすることに。松尾平までテントをあげる先発隊（中本、村松、明坂、藤山）と、昼過ぎに入山するOBのサポートをする後発隊（山崎、池田）という形である。後発隊は時間に余裕があれば松尾平まであがるようにといいきかせ、先に出発した。馬場島から松尾平までも相変わらず雪の量は少なく、尾根に取り付いてから10分ほどでようやくワカンを装着した。奥の院のあたりで、少し道に迷うものの、赤布や地図を頼りに無事に到着し松尾平にてテントを張った。このあたりで後発隊と交信を行い、OBと合流したこと、テントは馬場島に張り今日は荷揚げを16時半まですることを伝えられた。日没まではまだ余裕があったので中本、村松で1350メートルくらいまで荷揚げを行い、明坂、藤山はテントで水づくり。テントに帰ってくると、ちょうど警備隊の方が見回りに来てくれて、奥の院の辺りでアドバイザー（彼はOBのことをこう表現した）いると教えてくれた。コールをするとかなり遠くから返事が返ってきたが、我々が下りたときにはデポを奥の院のベンチにして、すでに引き返していた。デポを二人で幕営地まで担ぎ上げ本日の行動は終了。前日の夜行バスで熟睡できなかったせいか、夕食後はすぐに眠りに落ちた。

後発隊（池田）

（馬場島まで先発隊と同じ）

- 12:00 馬場島出発
- 13:00 伊折でOBの到着を待つ（山崎、池田）
- 13:30 OB伊折到着
- 15:00 馬場島到着、テント設営
- 16:10 デポ隊出発（OB、池田）
- 18:15 テント到着
- 20:00 就寝

前日に新大阪駅から夜行バスに乗り、まだ暗いうちに富山駅に着いた。豪雪地帯富山ということで富山駅周辺も積雪がすごいのかと思っていたが、暖冬ということで全く雪が積もっておらず少し残念な気もしたが、ラッセルが少なくなるという安堵も感じた。電車までも時間があったので各自朝食をとり上市に向け出発した。電車の車内で見た北アルプスの景色はとても綺麗だった。上市からはジャンボタクシーに乗り伊折に到着した。伊折には取材の方々がたくさんいらっしやって、村松が代表してたくさん取材を受けていた。そこから出発してからもしばらく取材陣がついてきて、格好良く歩きながらそのうち別れを告げた。平年より雪が少なかったこともあり、馬場島には楽に到着し時間的にも余裕があったため、2隊に分かれて片方は松尾平に、もう片方の僕と山崎さんは遅れて到着するOBの方々の迎え

に伊折へと向かった。伊折では 30 分ほど待ち、OB の方々と一緒に馬場島に向かった。時間次第では松尾平まで行けるのではという感じであったが、フル歩荷で OB の方々も行くとなると日没も近くなるのでデポだけしてその日は馬場島にテントを張った。

12月27日（2日目：明坂） 松尾平～1750mC2 天気：雪

7：00 出発

9：00 1300m デポ地点 後発組と合流

13：10 1750m テン場

15：10 デポ隊出発

16：00 1850m にデポ

昨夜はかなり雪が強く、テントが積もった雪で圧迫されるほどだった。朝はテント内が軽く酸欠状態で、バーナーになかなか火がつかなかった。撤収後、1300m のデポを目指して樹林帯をラッセルしていく。まだ雪の量は少ないが、慣れないラッセルで予想以上に体力を奪われる。1250m 付近で後発組と合流し、1300m で休憩しながらデポを回収する。その後社会人の山岳会チームが下から追いつき、大人数の隊列となる。徐々に高度を稼ぐとともに木が少なくなって雪が深みを増し、胸まで達するところもあった。ラッセルも蹴り込みが浅いと崩れるばかりで、疲労がだんだんと蓄積していく。藤山が一度、足がつったが、その後は問題なく行動できたようだ。1750m で尾根を南側に外れ、整地をしてテントを張る。少しくつろいだあと、各テント 2 人、合計 4 人のデポ隊を出す。16：30 頃にデポ隊が帰ってきたので夕食の準備をする。この間に天気図を書いたが、依然として気圧の谷の影響を受けており、明日も雪となりそうだ。明日の準備をして 19：00 頃就寝。

12月28日（3日目：山崎） C2～早月小屋 AC 天気：曇りのち雪

6：00 出発

7：30 1900mP

11：30 早月小屋

昨夜雪が降っており新雪が 20cm ほど積もっていた。27日のうちに少しだけ荷物を 1750m 付近にデポしていたのでデポまではラッセルもなくかなりスムーズに登っていた。デポ回収後は歩荷とラッセルでかなり消耗した。雪は深いところで腰ほどあり、今年は他のパーティーも大勢いたせい一年生のラッセルの上達が遅かったように思われるが、三日目にもなるとさすがに慣れてきたようであった。ただ斜面のラッセルに関してはあまりできが良くなかったように思われる。1900m 付近で後続のパーティーに追いつかれたのだが、そこからペースが格段に落ちみんなフラストレーションが溜まっていたと思われる。また自分は 2000m 付近から腰の様態が悪くなり以後の迷惑をかけてしまった。

早月小屋へ着くと地ならしが始まり、米澤先生がかなり念入りに雪を踏み固めていたのだが、最終日にもなるとかなりテントが沈んでしまったのでより念入りに踏み固める必要があると感じた。この日は隊員に疲れの色が出ていた（池田を除く）。

12月29日（4日目：藤山） 沈殿 天気：雪

5：00 起床

6：00 朝食、テントの雪かき

7：00 沈殿確定

9：00～12：00 雪洞づくり

16：00 夕食

18：10 就寝

昨夜の雪風が強く積雪はテントの三分の一ほどが雪に埋もれるほど。こちらのテントは昨夜のうちに水づくりを十分にしていなかったため朝は水づくりから始まったが、昨夜のうちにテントの前室においていた水袋が見つからずテント前に積もっている雪で水づくりをする始末。（この水袋は後日相手側のテントが誤って使っていたことが分かった）また、こちら側は反対のテントより起床時間を遅くしたため向こうがご飯を食べようとするころにご飯を作り始め、雪かきをするが遅れた。雪かきをしようにもスコップが見つからないのでは話にならない。数人がかりでひたすら雪かきをしてやっとの思いで見つけた。雪洞ほりについては特筆することはなかったので割愛する。ただ、この作業をするときにスノーソーが必要だったが雪で埋まってしまう、村松たちに探してもらった始末だった。スノーソーを持ってきたのは自分であり管理の甘さを痛感したことだけは書いておく。

あとは山崎が腰の痛みを訴えてきたのは心配だった。

12月30日（5日目） 天気：晴れ

アタック隊（村松）

4：30 AC 発

5：40 2400mP

6：50 2600mP

7：30 エボシ岩

10：00 シシ頭

11：10 劔岳山頂

15：00 AC 着

いよいよ山頂アタックの時がやってきた。起床時間は3：00としていたが、私は30分前には目が覚めてしまった。それは皆も同じだったようで、結局早めに起床して朝食の準備を始

める。麻婆春雨丼で腹を満たし、アタックの準備をする。テント内の緊張が高まっていくのが感じられる。

4:30、1年生たちに見送られ、ACを出発。前日のトレースは新雪で消えかかっていたので、交代でラッセルしながらゆっくりと登ってゆく。2400mPまではかなりラッセルがあったが、新雪の下のトレースが締まっていたおかげでそこまで苦労はしなかった。ワカンは一ピークの手前の灌木にひっかけてデポした。山岳会の方々のテントを通り過ぎ、2600mPへと向かう。ここで、最初の岩場が現れる。岩の隙間を這うようにして通過するのだが、難しくはない。その後、急な雪面を、先行の2人パーティーと交代でラッセルしながら登る。場所によっては腰まで潜るので閉口した。6:50、2600mPに到着。ここで短い休憩を挟む。少しずつ空が白み始める。心配していた天候も大丈夫そうだ。

次に現れた小ピークは直登したが、行き詰まってしまい結局下って池の谷側を巻く。ここから雪稜をたどってエボシ岩に達する。岩混じりの急な雪面が続くが、ザイルが必要なほどではなかった。ここから先は岩稜と雪稜が次々と現れる。決してミスをしないように、慎重に通過していく。シシ頭の前に来たところでアンザイレンし、コンティニューアスでしばらく進む。シシ頭の岩峰は、池の谷側に少しトラバースした後、5mほど岩場を直登してリッジを超え、カニのハサミ側の岩場を10mほどクライムダウンして片づけた。次に現れるカニのハサミは池の谷側を巻いて、最後の悪場のルンゼに入る。このルンゼは20mほどだがかなり急峻で、一部氷化している部分もあって緊張した。右手のピッケルのピックと、両足のアイゼンの前爪だけが頼りだ。ここを超えると別山尾根との合流点標識が現れ、ついに稜線に飛び出す。頂上は目と鼻の先だ。強風に煽られないように注意しながらナイフリッジを進み、11:10、劔岳の山頂に立った。

厳冬期の劔岳の山頂・・・そこに今、自分が立っているということに正直、実感が沸かなかった。しかし、上がってくる仲間たちと熱い握手を交わすうちに、喜びが全身に込み上げてきた。

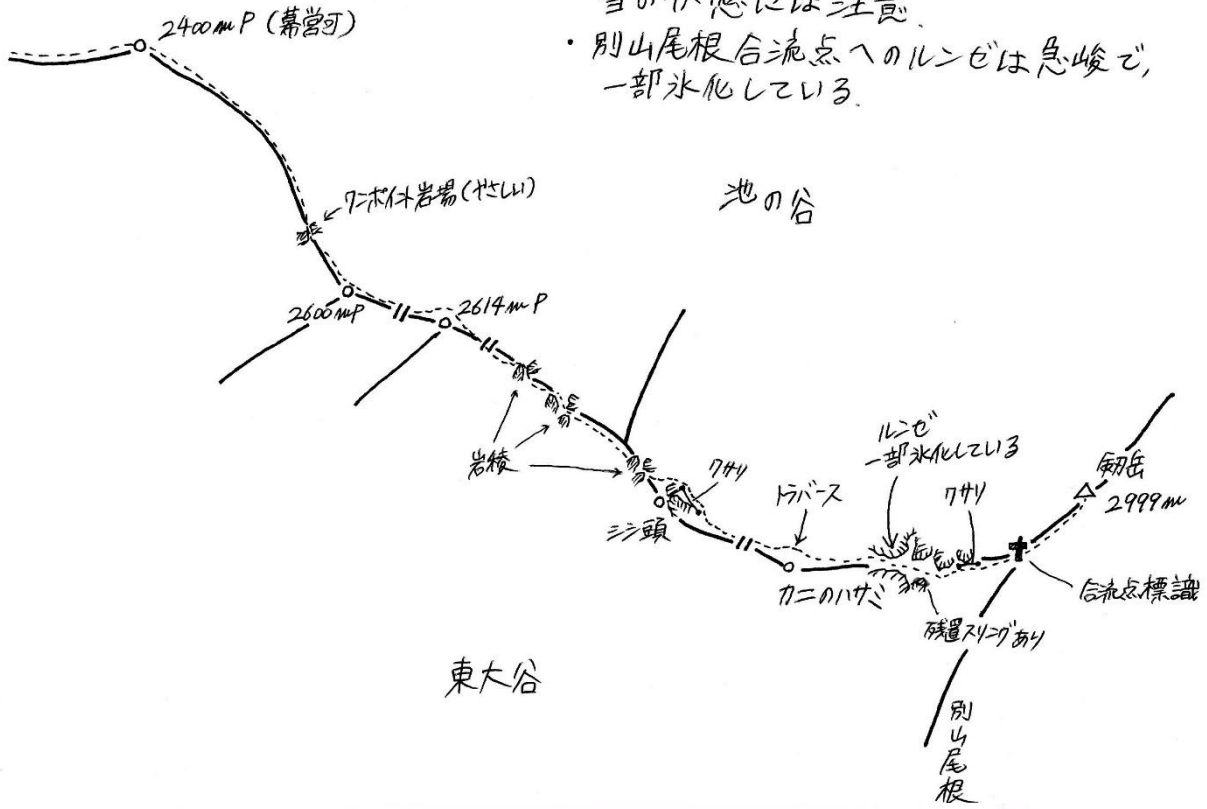
しかし、ゆっくりと感傷に浸っている時間はない。全員で記念写真を撮り、長い下降に移る。ルンゼの下りはザイルをフィックスした。シシ頭の岩場は、登りの時には気づかなかったが、池の谷寄りの所に鎖がでていたのでこれを利用する。一応ザイルを固定したが、岩場は容易なバンド状になっており、必要なかった。シシ頭を超えた後は特にザイルを出すところはなく、しっかりしたトレースに沿ってどんどん下る。快晴の中、周りの絶景を楽しみながらの下降だった。2600mPで本峰をバックに記念撮影。ワカンデポを回収し、15:00、無事ACに帰還する。出発から10時間30分が経っていた。

早月小屋でコーラとビールを買い、全員で登頂を祝う。テントの外でくつろいでいると、小窓尾根方面にブロッケンが現れた。まるでアタックの成功を祝福されているようだった。夕食も豪華にペミカン2個を使い、ささやかなごちそうを楽しんだ。

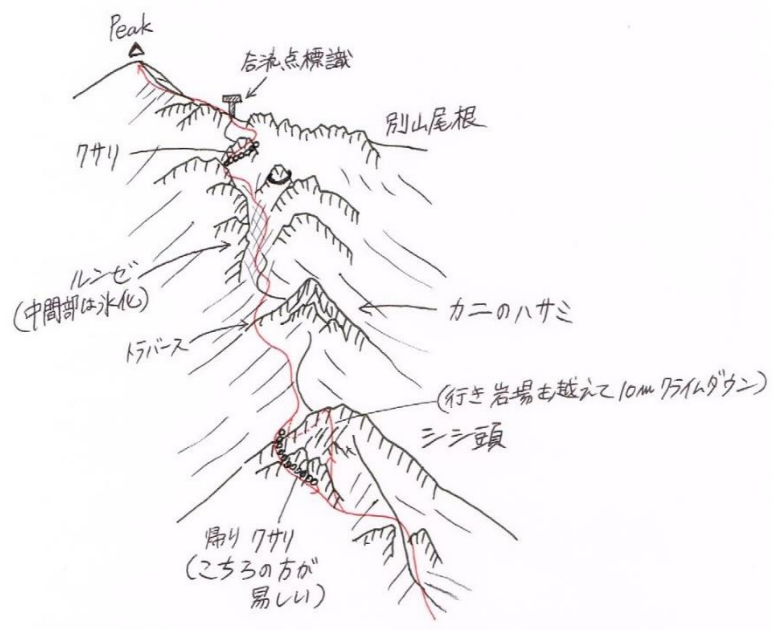
以下の図は、核心部の概念図および俯瞰図（村松）

<早月尾根 核心部>

- 2600mより上は岩稜と雪稜の連続
- 池の谷側をトラバースする箇所が多いため雪の状態には注意
- 別山尾根合流点へのルンゼは急峻で、一部氷化している



<シシ頭～山頂>



沈殿組（明坂）

- 4：30 アタック隊出発
- 8：30 雪洞掘り開始
- 11：30 雪洞掘り終了
- 15：20 アタック隊帰還

早朝アタック隊を見送り、1つのテントに集まってトランシーバーの準備をする。定時交信は6：00から12：00まで2時間おきだったが、いずれも繋がらなかった。8：00の交信に失敗したあと外に出ると、天気は快晴だった。目にダメージがないように念のためゴーグルを用意し、あちこちで写真を撮る。景観を楽しんでいると、小屋側から小窓尾根に向かって走る野ウサギを発見。とっさに池田が撮影するも、雪に紛れどこに写っているのかは判然としなかった。その後、昨日掘った雪洞をさらに広くしていく。3時間連続で掘り続けると結構疲れたので、ここで切り上げて昼食を摂り、水を作り始める。14：00過ぎに先頭の2人組パーティーが下りて来て、アタック隊の無事を知る。15：00頃になると、ようやくアタック隊が見える位置まで下りて来たので、カフェオレを作って迎える準備をする。記念撮影をしたあと、向かいのテントの2人組が柿ピーとボロニアソーセージを下さり、いつもより豪華な夕食となる。明日の計画を話し合い、19：00頃就寝。

12月31日（6日目：藤山） 1年生2600mP往復

- 6：00 起床
- 7：00 出発（メンバー：中本、村松、山崎、明坂、池田、藤山）
- 8：00 2400m地点到着
- 8：40 2600m地点到着
- 9：10 早月小屋着
- 10：50 早月小屋発
- 13：15 馬場島着（山崎、藤山、池田）
- 14：15 馬場島全員無事着
- 17：00 夕飯
- 20：00 就寝

昨晚、小屋の方から31日は雪で荒れる可能性があると言われていたため朝は沈殿か行動かで判断を決めかねていた。活動するとなると早速みな準備にかかる。積雪量は少なくテントの雪かきも必要なかった。天気は曇り。ガスはあまりなかった。池田のアイゼンの付け方に問題があったのか、出発前にOBに何か言われている様子だった。アタックザックはそれまでの歩荷量に比べれば月とスッポンであるが、やはり体にはこたえるものがあった。池田のアイゼンが途中外れてしまうトラブルがあったものの、2400m地点あたりでの休憩でアイ

ゼンを付け直してからは問題なさそうだった。事前にアイゼンの長さを冬靴に合わせて調整してなかったのだろうか。まあ、一大事にはならなくてよかったと思う。早月小屋についてから天気が荒れそうになく晴れ間も一部見えていたため下山を決定。ぱっぱと片づけをすませ下山開始。自分は下山スイッチが入ったため 2 時間半くらいで早月小屋 (2200m) から馬場島 (750m) に下ってしまった。帰心矢の如しとはよく言ったものである。

1 月 1 日 (7 日目 : 村松) 下山 天気 : 晴れ

6 : 00 馬場島発

7 : 40 伊折ゲート

8 : 20 伊折集落

合宿最終日、今日で山ともお別れである。4 : 30 くらいに起床して朝食し、手早くテントを撤収する。6 : 00 馬場島を出発。入山の時に比べるとかなり積雪量は増えていたが、トレースがついていたので問題なかった。下山日というだけあって、皆ハイペースでどんどん飛ばす。7 : 40 伊折ゲート到着。しかしタクシーの姿が見当たらない。電話すると積雪のため伊折集落までしか入れないといわれる。皆の表情が一気に暗くなった。伊折集落まではさらに 30 分ほど歩かされた。単調な林道の歩きにうんざりしてきたころ、ついに目の前にタクシーが現れた。歓喜の瞬間、背中 of ザックの重さをものともせず皆全力疾走でタクシーに飛び乗った。暖かい車内でくつろぎながら、これで合宿も終わったのだな・・・としみじみ感じる。天気が良かったおかげで、窓の外に剣岳を仰ぎ見ることができた。あれに登ったのか・・・と、合宿での様々な場面を思い浮かべながら、徐々に遠くなっていく剣に心の中で別れを告げた。

◆各係の反省

食糧係

(山崎) 今回初の試みでペミカンにベーコンを入れることにしたのだがかなり好評であった。今後のペミカンにはベーコンを入れることが通常になることを切に望む。

しかし具の量が少なかったと思われるのでジャガイモを各ペミカンに一つ増やしベーコンも倍の量増やして良いかもしれない。また今回出番がなかったきな粉餅だがあれは廃止した方が良いでしょう。理由としては粉が気管に入るしのが乾くからだ。あと鴨南蛮そばだが味も量も問題ないのでアルファ米まで付ける必要はない。おおむねおいしいご飯が食べられたので良かったと感じた。

エッセンについては毎回おいしくないなので次回新たな試みが必要であると感じる。カロリーはまず別として、山で何を食いたいここからスタートするのが良いかもしれない。また食料係をすると毎回思うのだがアイデアを共有してほしいと思う。一人ではかなり負担

の多い係なのでどうにか分散できるようにしたい。

(池田) 僕は食料係であったが食料計画に携わることもなく、先輩方に任せきりだった。しかし食料計画は、1年はしないということだったのでいいとしても、僕のいるテントには食料係は僕しかいなかったなのでその日の食事は何かということくらいは覚えておくべきだった。

装備係

(村松) 夏合宿の反省を生かして燃料の量に関してはかなり念入りに検討した。結果かなりの量を持っていくことになったが、予備日も含めるとちょうどよい数だったと思う。他の装備に関しては特に問題はなかったと思うが、ACでの装備の保管方法に悪いところがあったので反省したい(12/29の記録参照)。また、1年生で防寒着を十分に持って来ていなかったり、アイゼンの調整ができていない者がいた。ここは詰めが甘かった。

(藤山) 装備係だったが自分自身が装備について熟知していなかった。無念。

医療係

(山崎) 今回の合宿にあたって買い足した物があるのだがそれらは部室にまだストックがあるものがほとんどであったので確認が必要だと感じた。口内炎のできるものがいたのでビタミン剤を医療係に持たせると良いと感じた。

(明坂) 今回は医療係を担当し、準備では中身の確認や補給などを行なうことができた。しかし合宿中は医療係であることをすっかり忘れてしまい、藤山の脚がつったとき、付近にいながら何の対応もしなかった。そのときはOBの中溝さんが手当てをして下さったが、それを自分ができたかと思うと怪しい。夏合宿での山田の脱臼も同様に、的確な治療方法を覚えておく必要があった。

気象係

(村松) 皆が天気図をかけるようにすべきであった。合宿前の様々な準備に追われて天気図講習にまで手が回らなかった。これからは合宿前だけでなく定期的に天気図の講習会をしなければならぬだろう。

◆個人の反省

中本裕哉

まずは登頂できたことを素直に喜びたい。4年目にして初めて、厳冬期のアルプスの頂を踏めた。それも剣岳である。3月の唐松岳での春山合宿で眺めた剣に、夏に源次郎尾根から登った剣に、まさか12月に登りに行くなんて想像もしていなかった。また、今回の早月尾根は私が1年生のときに敗退しているルートというだけあって、2度目の挑戦。絶対に失敗したくなかった。そのため、トレーニングは週に5日は近くの公園を10キロ走り足腰を鍛え

た。おかげで体力的な問題はほとんどなかった。合宿を思い返してみると、自分ではどうしてなのかわからないが、アタックの前日は登頂できるという自信に溢れていた。理由として考えられるのは、一つは、昨年までの冬合宿で十分に経験を積んできたこと、もう一つは、中溝さん、米澤さんという山岳部の大先輩がいることで精神的に余裕が持てたせいだろう。そして我々のアタックは無事に成功した。合宿を終えた今、思うのはまだまだ色々な山に登りに行きたいなということである。後輩の部員たちもよく頑張ってくれた。今後も頼もしい後輩たちとともに活動を通して成長していければ幸いである。

村松 弾

合宿が無事成功裏に終わらせることができ良かった。今回は冬の剣、しかもリーダーということでこれまでの合宿とは比較にならないほど不安、プレッシャーがあった。冬山で剣岳を狙うと決めた時から、冬山のことが頭を離れた日は一日もなかった。それだけ、今回の冬合宿への思い入れは強かったと思う。準備、練習もつらく大変なものだったが、合宿の成功ですべてが報われた。

事前の練習では、スタミナの重要性を科学的な解説を付けて部員たちに伝えていたが、皆これをよく理解してくれており、自主的にトレーニングを積んでくれた。実際合宿でもこの効果が表れていたようで、とても頼もしく感じた。今回の合宿の成功はみんなのおかげである。また自分も、計画に不備がないか時間をかけて念入りに煮詰め、完璧な計画となるように努力したつもりである。実際の合宿で、行程が計画通りに消化されていくのは無上の喜びであった。

合宿にアドバイザーとして参加して下さった中溝氏、米澤氏、そして現役のメンバーたちの頑張りがあって今回の成功があった。頼りないリーダーを支えてくれてありがとう。

山崎 史也

まず剣に登頂できて本当に良かった。今回の合宿は大成功と行ってよいだろう。

しかし前述した通り歩荷で腰を痛めてしまったので筋力トレーニング不足が否めない。また山頂アタックのときオーバーミトン+アイゼンでのちょっとした登攀にかなり手こずったので練習が必要だと感じた。

また腰以外体力的に問題はなかったので合宿前のトレーニングはかなり効果があったとしてよいと思われる。

来年は自分が最高学年なのでしっかり後輩の指導にあたりたい。

明坂 将希

まず行動面については、ラッセルが浅かったことが挙げられる。先頭ときは速く進むことしか考えられず、足を鋭角に蹴り込むことを忘れていたため、足場は固まらず崩れるばかりだった。また、体力についても不安を感じた。今回は合流した社会人パーティーのラッセル

が遅かったので合間に休むことができたが、これがなければ恐らくバテていたことだろう。何より雪をかく動作で肩や腕の疲労が大きく、上半身のスタミナを鍛える必要があると思った。

次にテント生活についてである。1日目は竹ペグとフライが緩くテントに雪が積もってしまい、3日目以降はテン場の整地が足りず、下の雪が溶けて大きな窪みができてしまった。冬山での設営技術、知識が不足していた。また、朝の撤収ではパッキングやワカンの取り付けに時間をかけ過ぎてしまった。前の晩にできる限り準備したつもりだったが、まだ精練の余地があると感じられた。

池田光希

今回はじめての冬合宿ということもあって想像もできない世界に行くので、死の危険を感じるのではないかと合宿前にはいろいろなことを考えてしまっていた。しかし先輩方やOBの方々にも支えられて無事帰ってくることができて、まずはそれが何よりも良かった。たくさんを経験できてよかったことも多々あるが迷惑をかけてしまったこと、反省すべきことも多くある。まずは装備の不足だ。自分の勝手な思い込みでカイロを持ってこなかったり、フリースを忘れてしまったりした。今回はそれによって何か大きな問題を引き起こしてしまうことなどはなかったため良かったが、次回からは絶対にないようにしたい。また準備不足の点でいえば、アイゼンの準備がなかった。事前に自分の登山靴に合わせていなかったがために、着けるときになって調整して時間をくって迷惑をかけてしまった。

藤山誠也

自分はワカンの操作をはじめとして初めて使う装備が多く、初期の頃はいろいろと手間取ってしまった。また、ワカンを付けた状態での雪上歩行、主にキックステップを入れるのだが、それに難儀してしまい挙句のあてには足をつってしまった。つったとき中溝さんにゴムバンドのようなものを貸していただき何とか処置を済ませて活動を再開した。正直足をつった27日はシュラフも濡らしてしまい一睡もすることなくそのまま28日のラッセルワークになってしまったことは反省すべきだと思う。おそらく技術と知識不足からくる体力の浪費によるものだった。合宿前に体力はつけていたつもりだった文一層ショックだった。だが今回の合宿でキックステップの要領も大体わかった。次回は体力の浪費を抑える技術をもって合宿に臨みたい。戦力外通告だけは受けたくないものだ。今回の合宿において自分は力及ばず忸怩たる思いであった。この反省をもとに次の合宿では強靱な肉体と精神で挑みたいと思う。

◆合宿で気づいた点、反省点

- ・天気図をうまく書ける人が少なかったこと。明坂の天気図がなければアタックの判断は下

せなかったと言っても過言ではない。今合宿では片方のテントにのみ天気図を書ける人が偏ってしまい、テント単位での分担ができなかった（藤山、明坂、池田）。

・アタックの日にトランシーバーが繋がらなかったのは致命的であると感じた。先輩たちアタック隊と 6:00、8:00、10:00、12:00 の四回にわたって交信を試みたが通じなかった。結局先に帰ってきたグループに隊の安全を知らせてもらい安堵の息をつくまで、先輩たちの身によくないことが起こったのではないかと勘ぐったりもした（藤山）。

・合宿中はビタミン源が少ないので、エッセンなどで補いたいと思った（明坂）。

・装備の管理の仕方。29日はスコップ、スノーソー、ワカン等を探すのに苦労した。スコップはテントの前室かその付近に立てておくなどわかりやすい場所に置いておくべきだと思った（藤山）。

◆合宿を終えて ―総括

今回の冬山合宿は、久々に成功と言えるものであったと思う。

下部で例年より雪が少なかったことも幸いし、アタックキャンプへの荷上げを予定通り行うことができた。アタックに関しても、一日の天候待ちを挟んで、素晴らしい好天のチャンスをつかみ登頂を果たした。部員全員の頑張りとおOBの先生方の的確なアドバイス、そして運にも恵まれた結果であると思う。

しかし、今回の合宿の成功に慢心することなく、この経験を生かし、今後の山行へとつなげることが重要であると思う。

合宿での細かい反省、気づいた点などは上にまとめた通りである。これらをしっかり分析して、次の合宿への糧としていきたい。

自分にとっては次の春合宿が、リーダーとしての最後の合宿となるが、まずはこの春合宿を成功させたい。そして、これから部を担っていく1, 2年生たちが、今後もさらなる活躍をしてくれることを願っている。

最後になりますが、今回の現役合宿に参加し、様々な場面でアドバイスをくださった中溝先生、米澤先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。（村松）